

四十、妄語第一火尚能焼大海

『御一代記聞書』にいわく

「一。人はそら言申さじと嗜むを随分とこそ思へ、心に偽りあらじと嗜む人はさのみ多くはなきものなり。」
また言わく

「二。心中を改めんとまでは思ふ人はあれども、信をとらんと思ふ人はなきなりと仰せられ候。」

以上を拝読すると、人の心根にも、段階のあることが知られる。

- 一。世には、そらごと申さじと嗜みさえせぬ人がある。
 - 二。次には、そら言申さじと嗜むを随分と思ふ人、
 - 三。心に偽りあらじと嗜む人は少く、
 - 四。心中を改めんとまでは思う人はあつても、信をとろうとする人はない。
- 以上のごとく四つの世界が示されてあるようである。

女は概して口数が多い。口数が多い者ほど、悪いこと、いらぬことを、多く言うものである。その自分の言う言葉の奥に聞き手がいないがゆえである。

忠臣蔵の四十七士たちが、けつして大事を、その妻女に語らなかつたのは、思慮深いことであつた。多くの女、およびそれに似通うた男には、「この事は、君にだけに話すが、けつして他に言うな」と言つて話しておけば、必ず、そのとおりの注意とともに他に伝えるものである。しかしながら、もし妻にして、この放送局をやめないならば、彼女はけつして、良妻賢婦ではない。いつかはその夫をして、臍をかましめる日がある。

女は、多く、語らなくてもいい人の旧悪を掘り出したり、古傷にさわつたりするものである。念仏申すべき口を持ちつつ、「奥様はご存じないでしょうが、お宅の旦那様は、学生時代には……」いらぬことを語つて、人の心をかき乱して喜ぶ、こうした悪い習慣が嗜まれてこないならば、おそらくは、その人の上に念仏の光は出ないであらう。

もしそれ、人を、念仏の人を、長者を、賢人を、傷つけんがために、無実の事を虚構して、これを他人に宣伝するがときは、まことに恐るべき大罪である。如来は大妄語の人を、八大地獄中、第五の大叫喚地獄に墮在すと説きたもう。地獄までゆかずとも、この世において、言葉多き者、嗜まざる者の世界は、大叫喚の喧騒、喧嘩がみちている。

『往生要集』に、源信和尚、正法念経によつて説いていわく、

「獄卒罪人を呵責して偈を説いて云く、妄語は第一の火なり。尚能く大海をも焼く。いわんや妄語の人を焼くことは、草木の薪を焼くが如し」と。

恐るべきは妄語である。悪口である。そもそもまた口である。世語に「一犬虚に吠えて万犬実を伝う」という。万犬に実なりと伝えさせんとして、虚妄を語るがごときは、大妄言以前に、邪見であり、五逆謗法であり、その心の底には、まことに無間大地獄の因を蔵するものである。

「此の無間地獄は……五逆罪を造り、因果を撥無し、大乘を誹謗し、四重を犯し、虚く信施を食する者、此の中に墮つ。」(『往生要集』)

まことに、人の信施によつて食いつつ、「父を殺し、母を殺し、仏身より血を流し、阿羅漢を殺し、和合僧を破る」がごときは、最悪悪人、人天ともに許さざる大逆である。かかる大逆も、すべて必ず口より言葉となつて出でて、妄語となる。

如来の言葉を実実言という。実とは真実であり、如とは契うということである。久遠の本仏の真実本願そのまま、言語となつて流れ出でたるもの、すなわち如来如実言である。この如来如実言こそ真実教である。この如来如実言がそのまま衆生の心中に徹した時、衆生においてはこれを応信という。かるがゆえに、応信とは、如来真実の言が衆生において生きたのである、実現したのである。されば信心とは、まことの心である。この信の心、やがて衆生の一切を生かすところの、人格の真実生命となるのである。

口の問題は、心の問題に移る。心のいかんは、その口によつて知られる。「人はそらごと申さじと嗜むを随分とこそ思へ、心に偽りあらじと嗜む人はさのみ多くはなきなり。」大法を聞きつつもなお、口に虚言を言うまいと嗜む人は少い。しかるに蓮如上人は「人は虚言申さしと嗜むを随分とこそ思へ」と、口を嗜み慎むくらいを好しとなしたまわず、「心に偽りあらじと嗜む人」をあげ、その人は「さのみ多くはなきなり」と歎じたもう。

もし口のみ気をつける人がありとすれば、言語となつて出でんとする直前、嫌を好きとも、来るなを来いとも言い換えることができるであろう。しかるに口舌二寸、刹那に赤を白と言い換え得るがごときは、すでに、綺語である。妄語である。問題は、口舌の問題にあらずして、心である。心こそ嗜むべきである。

心に偽りあらじと嗜むこと、まことにこれ人の子の一日も忘るべからざることである。

たといその言動は鈍くとも、才子ならずとも、心に偽りなき人は、必ず世の尊重するところとなる。朝に夕に「心に偽りあらじと嗜め」のこの金言、わずかこの数言を真に頂き、まことに真に服膺したならば、過去一朝にして天下に名を売り、やがて間もなくさびしくも世間から葬られた、多くの小才子たちの哀れな末路はなかつたであろう。

世の才子は、真実であることよりも、世に売り、形の盛大なることを尊しとするがゆえに、一世を欺くのである。浅薄にして盛大なるもの、そこに留まる者は、その心に偽りを生じ、しかもそれを知らず、やがて身の破滅となるのである。一朝にして幾十万の人を得るがごとき精神運動には、必ずそこにインチキのあることを知らねばな

らぬ。それはみな、「心に偽りあらじ」と嗜めとの、この一句の法門すら生きていなかったがためである。「心に偽りあらじ偽りあらじ」と来る日も来る日もまことに嗜むべきである。これまことに、自らを道に生かし、自らを安きにおき、自らを向上せしむる者の必然の心得である。

心に偽りあらじと嗜むことなければ、いかに美しい言葉も、頭燃をはらうがごとき活動もすべて、諂偽を出でず。諂い装飾して外へ外へと流転し、人目をゴマ化し、人目を恐れて、ご冥見を恐れず、やがて極まるに及んで、底なき闇にのまれるのである。しかるに、心に偽りあらじと嗜む人は、たとい時には世を挙げてこの人を疑い、悲境に沈むとも、その内心に安心の一境あつて、一貫の歩み乱れず、やがて雲霧の去る処、人格の光輝くであろう。

心に嗜みなき人は、必ず深き慮なくして、軽率に語り、軽率に行うものである。わが過去をふりかえる時、身の毛のよだつがごとき失敗は、みなこの軽率から生まれている。この軽率が時に人の一生を殺す。

「私は、けつして深い考えがあつてしたことではありません。」

大きな結果をまき起こした日、涙の中にそう語る。しかしその深い考えでしたことでないがゆえに、その人の真価なのである。深慮なくしてすることの上にこそ、その人の真の相が現われてくる、心の一番底にあるものが、不用意に飛び出るのである。妄語、悪口を人の耳に語つて歩く愚かなる女が、なんで深い慮を持つとう。しかも3軽率あればこそ、それがその女のすべてである。世間に「膝とも相談」というのは、事は必ず深慮に出づべきをいうのである。

人は大事だと思えば、必ずこれを友に、兄弟に、親に、妻に夫に相談する。

家族数人、平生不断、その間に語る時すらも、その一言一行、これを師に問い、夫に問い、み親に問うの思いあつてのみ、その一生は道光明朗たるを得るであろう。

「一。心中を改めんと迄は思ふ人はあれども、信をとらんと思ふ人はなきなり
……………」

心中を改めんと思う、人はたいがいこれでこの世を終るのである。しかるに、心中を改めよう改めようとして歩むは、譬えば風の中に消えやすき火をともしてゆくがごとくである。

信は、不滅の燈である。如来、如来を衆生の上に実現し、本願そのままの一道衆生の上に開け、如来の本願力に住持せられ、如来の智慧光に照らされ、撰取されて、自然に、わがあるがままのすべてを浄化し聖化せられて生きる世界である。

されば、真実信心の人は、開かれたる眼によつて、われおよび人生のありのままの正体を凝視しつつ、合掌して一切を念仏の中に受け取つて生きる。信の世界に一点の偽り許されず。

信心をとるとは、如来の真実心に帰入することであり、如来の真実に生かされることである。

心中を改めようとする者には、真面目に生きようとする態度はある。しかれども究竟じられた自覚の世界ではない。心の底には、いまだ粉碎されざる我あり、偽りがあり、傲慢があり、退転があり、不安心がある。頭が大地につかず、久遠の如来を知らず、自覚全からず、砂上の楼閣、幾度か崩れ崩れてついに空しく終わるのである。

如来金剛の力に生かされる信の世界こそ、人間最後の自覚の世界である。無我の道義、自然の泉、不用意の間にも、心に憶念、身に礼拝、口に念仏と顕われて、仏凡一体の世界に生かされる、これすなわち信の世界である。しかも、大聖も聖人も、この信の人なきを歎じたもうのである。

雪の降る日、聖人を憶念しつつ、深き思いにこの一文を綴る、二三のことども、わが心を悲しませ、念仏のいよいよ極難信たるを頂く。わがおもい、はてしなくつづけども書きおおせず、口のかろき女の子よ、いくとせ聞けども信心成就せぬ女の子よ、よくよく考えて信に至れ、信なきはかなしくさびしくおろかなることぞかし。(十二月中旬加計支部にて)